

## 大学放浪記 (45)

伊藤信孝

マエジョ大学・客員教授・再生可能エネルギー学部

長年タイの大学で働く機会を得て、常々感じて居ることは、「このところを、いくらかでも改善すればもっと良くなるのに」とか「ひょとすると大学ランキングも大幅に上げる事が出来るかも知れない」と残念に思うことが多々ある。文化なのか、伝統なのか、はたまた個人の、あるいは大多数の共通した妥協点なのか、その辺は定かではないが、いずれにしても改善した方が良く、改善すべきであると常々考えて居る部分が多々ある。しかし如何にすればよいかでいつも二の足を踏み躊躇させられる。タイに限らず、アジアの人の多くが、人前で注意されて恥ずかしい想いをしたり、プライドを傷つけられることを極めて嫌うというところが有り、注意や助言をしたりするにも、この点を十分に気配りして行うべきであると聞いているからである。また、客員教授という立場があっても不要な出しゃばりをするなど言われ、人間関係が悪くなるのではと言う懸念も働く。それでは何のために客員教授として在籍しているのかわからなくなる。よかれとおもって取った行為、行動が逆に人間関係を悪くし、一時的のみならずその先の将来までもその関係が続くのは避けたいと考えるのは自然であろう。言うまでも無く、そのまま会う必要が無い関係になってしまえば、それはそれでひとつの解決法でもあるが、毎日とは言わなくても同じ組織で貌を合わせる関係を維持する以上は、できるだけ負の関係を維持したいとは誰も想わない。しかし、どうしても言わなければならない、これ以上は放置しておくことは、将来的にも良くないと判断したときは覚悟をして言うことにしている。あくまでも保身のためでは無く、組織全体、大学、学生の教育と言う観点からである。定年退職し、今更名誉欲、や金銭欲はさらさらない。完全に自由と言う状況で無くとも働く機会、場所があるだけで十分に感謝に値する。しかし、だからといって言うべき事も言わず、気付いていても見て見ぬ振りをしていたのでは存在の意義や意味を疑う事態になる、常に自然体で、中立、我欲を棄て、公のためにこそ行動すると言うのが基本理念である。在職中はその様には行かないが、一職を終えた身分では極めて気軽である。もともとカネには縁が無い人間である事を自覚して来たから、なおさらそうした気持ちは持ち合わせてはいない。しかし人間関係を悪くする事は極力避けて、良い解決策を見出すべく配慮する事は組織にとって重要であると認識して居る。

大学のみならず、タイの多くの組織でもっとも指摘される事項のひとつは「時間に遅れる」事である。会議にしても定時に始まることは殆ど無い。時間厳守が徹底して居ない。中にはそれを憂う人も居るが、少数派で大多数がそうで無ければ良い方向には動かない。自分のみならず、関係する全体が貴重な機関を無駄にして居ることに、余りにも寛大である。言っても改善される事は先ずないと言う半ば諦めにも似た感覚が日常的と言うと失礼

かも知れないが、ほぼ事実である。またタイは車社会であり、移動の多くは車である。車であれば渋滞に遭遇すると身動きがとれない。渋滞は逆に定時に到着できない言い訳の理由として用意されて居るかにも想われる場合がある。渋滞が予想されるのであれば早めに出れば良いのであるが、遅れても良いと言う意識が潜在的に働いているのではないかとさえ感ぐりたくなる。日本人の多くも、或いは多分その他の外国人の多くもタイを訪れ、しばし滞在した事のある人であれば、ほぼ同じように感じて居るのではなからうか。ならば筆者がわざわざ書く必要は無いと言う事になるが、「何故敢えてそのことを書くのか」というと、それは教育の進展に大きな影響を与えているからである。例えば、国際学会やシンポジウム、ワークショップなど、学生を対象とした国際学術交流事業を大学が企画し、公費を使って事業を展開する。筆者は何時も「公費を使う以上、それなりの義務を負うのが当然であり、帰国後の報告書の提出は当然で、最低の義務で有ると強調し、レポートのページ数、フォーマット、記載すべき内容、提出期限の厳守、などを指示して提出を義務づけているが、提出期限までに提出されることは殆ど無い。それも申し合わせたように、誰ひとりとしても提出しないのである。あたかも知らない、あるいは気付かない、出さなくても影響はないから提出する必要は無い、とでも考えて居るのではないかとさえ懐疑的に想わせる程の無関心、無気力、無視にも似た対応である。何も言わなければ、ずっとそのままである。報告書は公的資金をどの様に使用したかと言うエビデンス（証拠書類）であり、提出は義務であることはもちろん社会一般の常識でもあり、エチケット、マナーでもある。大学がオファーする学術交流事業は学術研究論文の発表、論文の投稿が主たる内容になって居るが、筆者は国際感覚、国際的常識、エチケット、マナーを学び、人的ネットワークを拡げ、情報、知識などをシェアする場でもある事を強調している理由がそこにある。LINEでグループ・チャット (Group Chat) を作り、そこに関係者が必要な情報、アナウンスメント、連絡事項を適宜書き込み共有する場に、報告書提出も提示してあるから、知りませんとは言えない。知らないのであれば知らない本人の責任である。にも関わらず報告書提出の義務を負うべき対象の学生からは誰一人として提出がない。これを異常な状況と判断するのが正常な見方である。しかし実際に目の前で起きている事実はそれとは正反対、真逆である。放置しておけばそのまま未提出の結果となる。しかし全員が提出しなければ問題は無からうという共通した安易な判断がその行為を許しているのではないか。事業参加を終えて帰国し、2ヶ月も経っても何の進展もない。そうした学生の対応に、教員も誰一人として注意もしなければ声も上げない。

そして報告書提出の2回目のアナウンスをしてからも提出者はたったの1人で、他の学生からは音沙汰がない。さらに注意を与えて、やっと提出が成されるという状況である、しからば「よりしっかりした内容の報告書であろう」とファイルを開くと、またしても落胆させられる。与えた記載項目に、どれほど中身のある反応をして居るかを見てみると、極めて「情けない」のもある。啞然としたというのはこのような場合のことを言うのであろうか。一例を示すと次のようである。

質問: 1) 今回のイベントに参加しようと思った目的や理由を教えてください。

回答: このイベントに参加したのは、トウモロコシ残渣からのバイオエタノール生産に関する研究成果を発表するためでした。The Tri-U は、私の研究テーマに関する国際展示学者です。また、外国人の友人と文化的な知識を交換したり、英語を話すスキルを練習したりすることも含まれます。

質問: 2) 今回の出来事について率直で率直な意見を述べてください。

回答: このイベントへの私の参加はきわめて急に決まりました。コミュニケーションのための言語に関して、両方を準備する時間はあまりありませんでした。そして、今回の相手への旅行は外国の友人と知識を交換する初めての経験なので、自分の意見を述べる自信がありません。しかし、これは重要なゼミに参加し、私の研究に合わせて応募する教授や外国人学者の提案から学術的知識の面で知識経験を高めます。また、海外旅行のための飛行機の乗り方、スタッフからのサポートへの連絡方法、自分の大学で行われた食文化の学習体験ライフ・スタイルについて説明し、他の機関の友人に紹介しました。

質問: 3) 今回のイベントで学んだ最も印象的な経験は何ですか？

回答: この旅行の印象は素晴らしいと思います。ホスト大学側のおもてなしという点では仕方のないことです。ホスト側は、動物園見学や文化交流、送別会などのイベント会期中も食べ物と旅行のための車を準備しました。

質問: 4) このプログラムをさらに改善するための提案を説明してください。

回答: 来年の自分達の大学での本事業のホスト役では、外国人の友達から異文化を学び、活動中にバディマッチングや宗教の違いを利用して協力し合うことだと思います。したがって、主催者は、来年このイベントに参加する外国の友人の参加を容易にするための場所を手配する必要があります。

質問: 5) 今回のイベントの総合評価を教えてください

Answer: 今回 Tri-U に参加したのは、旅行などで時間がかかることが多かった時期だったからだと思います。誤解が原因で、計画に矛盾が生じた。しかし同時に、差し迫った問題を解決することを学びます。この活動は、学術的な知識と経験の両方を提供し、また、他の学生とのネットワークを構築する良い活動だと思います。

上記は一例で有るが、報告書の全体の長さは 10 ページと記載してあるのに、提出された最終報告書がわずか 1 ページというのであるから驚きである。報告書提出とともにプレゼンでの報告も義務づけることも極く当たり前の対応である。何故、提出するのかという理由を以下に示す。

- 1) 公金での行事参加報告が義務で有り常識である
- 2) 事業の紹介と発展のための情報提供、身参加者への啓蒙、モチベーション・アップ
- 3) 事業を持続可能なものとする。まともな事業であれば予算も付くが何しているかわからぬ事業に予算が支給されることは少ない

- 4) 質とレベルの高い事業実施と継続により、次世代の人材育成と社会貢献を教育、研究を通じて行うのが大学の役割であることは言うまでも無い
- 5) 参加者を一堂に集めて、報告の機会と場を設けることで、参加報告者個々に他の報告者から学ぶ機会を与える。さもないと自分との違いがわからない(極端に言えば、どれほど自分が他の参加者との比較で劣っているか等)ので、事業参加における考え方のレベル、内容の質の相違を認識させることができる。このことが事業の持続可能性を確かなものとする
- 6) 同時に、論文発表能力に加えて報告における能力の向上(これは卒業後の就職において出張報告の提出に必要で、重要な事項でもある)
- 7) 他にもいろいろ理由、意義は挙げられるが全ては教育の一環である事を忘れてはならない。

何故、参加者個々がそれぞれの報告書を提出してそれで終わりということでは良くないのかについては以下の様である。自分が考えて居るレベルが全てで、他の参加報告者との差、違いがわからない。一堂に会して報告会を開催する意味、意義はここにある。この相違を見出す事により、他人から学ぶ事が出来る、オンラインなどの遠隔授業では聴講者の講義聴講時に於ける態度、姿勢が見えないことである。そしてその態度、姿勢が自己満足で満たされ、それで十分であると言う錯覚を持ってしまうことである。直接対面して話をする事の重要性とそのメリット、あるいは対面でない場合の不都合が再確認できる例でもある。単に1つの国際交流事業を散り挙げて見ても、あらためて教育の重要性とその方法に再検討する必要性があることと気付かされる。逆に、国際交流事業に限らず、学术交流だからと言って、学術研究論文のみを発表する事だけがその事業の目標で有り、それ以外は目もくれないと言う認識が大きく間違っている事を知らしめる例でもある。筆者が日頃から、強調していることが正しかったと認識し、自信を持った次第である。